近代中国東北地方の教育論－1905～1945 年における日本による統治の実相を視座として－

王 妮

要　　旨

磯田一雄の「「文化侵略」と異文化間教育―九．一八以前の満鉄付属地における中国人教育を中心に―」によると、1993 年 8 月 8 日に中国大連市で開催された「中国東北教育史国際学術討論会」は「実質的には戦前期日本が「満州.満州国」で行った植民地教育に関する日中共同の研究集会」であり、同研究会で多くの日本人研究者は、「満州.満州国」で行われた教育が「奴隷化教育」「文化侵略」であったか否かに、疑問を提議したのである。

その疑問点は主として以下の三点である。

①　「満州国」政府は中国人を「奴隷化」しようとする意図があったかどうかということと、実際に中国人が精神的に日本人の「奴隷」になったかどうか。

②「政策の意図」と「実際に収めた効果」とを厳密に区別すべきである。そういうところを無視して、「奴隷化」＝「皇民化」だけを強調するのは、地域間の違いが不明のままではないか。

③「満州」（ないし「満州国」）でいう「奴隷」とは何だったのか。（slave というよりはむしろ）「奴僕」（servant）に近いのではないか。

磯田の原稿に取り上げられた日本人学者の疑問はいずれも「満州.満州国」における日本の植民地教育を背景にしたものであって、その論点は　①「満州国」の教育（政府側の教育意図、実現度）　②地域間の教育差（「政策の意図」と「実際に収めた効果」に対する厳密な区別）　③「満州.満州国」でいう「奴隷」の意味合い、に要約できるだろう。

本研究は「これはどちらも日本人の研究者にとっては重要な問題提起に思われるのであるが、どちらに対しても中国側からの直接の反応はなく、議論はされることはなかった。この点はまさに殖民地教育問題をめぐっての日中学術交流上の大きな隘路とも言えるであろう。」という磯田の指摘を踏まえ、上述した日本人学者の提議した論点を念頭に、1905～1945 年における日本の「満洲」統治下で展開された中国東北地方の教育の様相を考察したものである。

本論文は主として、序章、第一章 近代中国東北地方の教育概説、第二章 近代中国東北地方の日本語教育、第三章 東北地方の労働力供出法、終章からな

っている。

序章は研究の目的と研究方法を述べている。

第一章は「日本による統治機構と教育機構の設立」「教育の過程と特徴」によって、近代中国東北地方の概要を紹介し、「中国近代教育宗旨の変遷」によって、全国一般の教育宗旨を「関東州」および「満州国」の教育宗旨と対照して、その異常性を明らかにした。また「中国近代における国民の「奴隷根性」について――魯迅の作品を視点に」という節で、文化や文学の革新、国民性の改善に関心を持っている近代の文化人として、魯迅を取り上げ、彼の主要な作品と言論から中国近代の「奴隷像」を検討した。

第二章は近代中国東北地方の日本語教育の特徴の考察を主としている。「関東州」と満鉄附属地の日本語教育施設について―中国人の初等教育を視点に」、「新学制の実施と特徴」「日本語教育から見る日本の殖民地経営動機」によって、それぞれ「関東州」「満州国」ひいてはその他の殖民地における日本語教育の特徴を探った。最後は取材レポート「関東州人の目に映った関東州の教育像―中国人教育を視点に」の分析によって、「関東州」における中国人の教育事情をより明確にするとともに、それを中国のその他の地方と比較して、地方間の教育差などを明らかにした。

第三章は東北地方の労働力供出法の考察している。「実業教育」と「満洲教育における奉公意識の浸透」によって、労働力育成の方法を探った。その他、「北満入植の原因分析」と「満洲国の勤労奉公制度」の考察によって、日本の労働力掠奪の一端を解明することができた。

終章は本論文を総括するとともに、残された課題について触れた。